摂津北部の戦国軍記

――軍記の在地化と変容――

松林靖明

一

摂津国北部の戦国時代を描いた軍記に『摂北軍記』[1]というものがある。現在の宝塚市から三田市にかけての武庫川上流の地域をその描く対象にしている、一巻ないし上下二巻の作品である。『三田市史』所収の『摂北軍記』は、

弘治元年の比より、中国あだかもおだやかならず、国々の領主又ハ郷士など所々蜂起し万民ともに安からず。

と、書き出される。弘治元年（一五五五）といえば、東では長尾景虎と武田晴信の川中島の合戦が、西では毛利元就と陶晴賢の厳島の戦いがあった年である。その時期の北摂の状況を述べようとするのである。続いて、

爰に摂津国伊丹有岡の城主村重ハ、かねてより何卒して一国の城主ともならむと志ざし、いろ〳〵謀るところありしが、今度の乱を幸に数多の家臣を集め、同年二月十一日早天より馬具武具にひしめきける。

と、荒木村重が「今度の乱」―何を指しているかは不明―に乗じて、摂津一国の支配をねらって兵を整えたというのである。

しかし、旧版『三田市史』下巻[2]が「摂北軍記などには荒木村重の有馬郡侵入は天文弘治のころなどとしてあるがこれは誤で弘治年間は荒木村重はまだ池田勝政の家来であった」と指摘するように、この記述は明らかに間違いである。同書は「松原系図」中に松原山城守義富が荒木村重と「天正元年三月」に戦った旨の記載があることから、天正元年（一五七三）の出来事であろうとしている。

『摂北軍記』は荒木村重の北摂侵攻を、巻頭に置く「伊丹有岡の城主村重北の庄合戦の事」の章で、村重の進軍に従う形で記し留め

る。やや長文になるが引用しておく。

程なく有岡の城を出立、先つ津の国北の庄を征伐せんとて、手初に小林城主高山清左衛門と合戦に及しが、村重勝利を得、高山降参しける。夫より同国山口丸山の城主、山口五郎左衛門を攻めんとて押寄せけるが、是も同じく降参を乞ふ。依て其勢を合せて千七百余人、同国有馬郡岡場の城主西尾備後守が居城に押寄せ、一時に攻め破り、備後守を討取たり。夫より三田谷筋へ入込けれバ、蓮花寺・金心寺等も降参を乞ふにより是を免るし、同所田中の城主小畑助右衛門を討散し、桑原大浪山の城主左衛門を亡さんと、彼の村重の勢一時に押よせしが、桑原の家臣畑吉太夫・稲葉久三郎等ハ、此度の村重勢勝に乗たる有様なれバ、味方勝利覚束なし、先此度ハ降散(ママ)を乞ひ後世を待ち給へと、主人を諌めけれバ、実にも然るべしとて、早速降参に及ければハ、村重是より其勢二千三百余人四方八面に陣取し、三輪戸熊の城主横道三郎太夫・同藤三郎をも討取り、深田村稲田城主中川佐渡の介等も一戦の後降参す。次に西野上村四ツ塚の城主干貝伊勢守と数日戦ふといへども、伊勢守武勇の大将なれバ、少しも臆せず互にしのぎをけづり、中々敗軍の気色なく、勝に乗たる村重も空しく無念の月日を送りけるが、同年冬十一月十七日有岡の早打来り、父市左衛門病気と申也となれバ、村重おどろき、諸陣へ一先帰城あつて然るべくと申つかわしける。則貴志村を陣払し、阪本の陣に山口・桑原弐人を残しおき、中川・高山・安部・小浜の勢を引連れ、有岡の城へぞ帰りけれバ、是より村重二度北の庄へ出ることなし。

ここに名前の載る城主たちは、ほとんどが他の資料に見出せない者たちである。集落ごとに割拠していた小土豪たちであり、地侍・郷士である。中谷一正氏は、「戦国期に於ける三田盆地」[3]に「有馬双書に見らるゝ土豪」を列挙している。

山口氏　山口村丸山の城主、弘治の比、五郎左衛門なる者あり。
西尾氏　岡場城主、弘治の比、備後守荒木村重に討たる。
高井氏　西浦の城主、十兵衛松原右近太夫に亡さる。
小畑氏　田中の城主、弘治中、助右衛門なるものあり。
松原氏　草下部村蒲公城、弘治中、右近太夫貞利なるもの之を築く。天正年間秀吉に亡さる。
桑原氏　大浪山の城主、弘治中、左衛門なるものありしも病歿して絶家。
横道氏　三輪村戸熊の城主、弘治中、三郎太夫荒木村重に討たる。
赤松氏　岡山に築城せしも山崎氏の為亡さる（永禄七年）。
中川氏　深田村稲田の城主、弘治中、佐渡介なるものあり。

青野氏　青野村高根山の城主、弘治年中、七兵衛貞政、越中政清あり。山崎左馬之介に亡さる（永禄七年）。

中村氏　井草村鳥山の城主也、広忠入道信斉あり。永禄七年山崎左馬之助に亡さる。

干貝氏　四ッ塚城主也。弘治中、伊勢守なるものあり。

『摂北軍記』は、荒木村重はこれらの土豪たちを次々と下して北上し、山口丸山城、岡場城、田中城と城を落として、遂に西野上の干貝伊勢守が守る四ツ塚城を囲み、数日送ったところで、村重は父市左衛門の病気の報せによって伊丹城に引き返したというのである。村重の父を「市左衛門」（『有馬郡誌』所収本は「重信」）とするが、何に依ったか不明で、『荒木村重史料』（伊丹資料叢書4）所収の十種の系図類にもその名は見出せない。荒木氏自身も『荒木略記』に「荒木一家ハ丹波之牢人にて小身ニ御座候」と記され、『穴織宮拾要記』④には「荒木摂津守ハ元来当国栄根村より池田城主筑後守へ草履取ニ出たる弥介也、次第ニ立身して茨木ぬか塚ノ城を責落し池田之城へ取、是より池田城主勝政聟ニして荒木十左衛門ニ成」と書かれているといった具合で、その出自や先祖は判然としない。村重は周知のとおり、池田の家臣であったが、早く織田信長に近づき、天正二年には伊丹親興を討って伊丹城を奪い、有岡城と改めて摂津一国を支配したが、天正六年には信長に反旗を翻し、七年には妻子を残して有岡城を脱出しており、家臣・妻子を見殺しにした「叛逆者」として、芳しからぬ名を残した武将である。

『摂北軍記』の書き出しは、上述のように、合戦の年代も真偽も極めて曖昧なものなのである。⑤荒木村重を引き合いに出しているのは、村重の摂津統一の過程で引き起こされた北摂の郷士・国侍らの興亡を描くことにこの作品の目的があったためかと思われる。

二

荒木村重の席巻で北摂は戦国の様相を呈してきた。「北津の国ハいまだ領主も定まらず、此辺を征伐して一城の主とも成り、武名を揚ぐべし」と、村重の攻撃を回避した干貝を倒したのは、播磨の名家赤松の一族岩谷の城主赤松兵部少輔氏保の子息たち、赤松藤兵衛吉広と松原右近太夫の家臣となっている畑山美濃守利忠である。勝利した吉広は岡山城（三田市東野上城ヶ岡）を居城とし、忠利は松原の蒲公城に戻る。永禄七年にいたって、「何卒此戦（有馬郡誌本「此乱世」）の時を見合せ切り出し勝利を得、一郡の主とも成り度思ふなり」と赤松討伐を企てたのが、山崎左馬之助恒政であった。山崎は丹波に近い本庄を本拠としており、本書『摂北軍記』では「本庄村の郷士山崎左馬之助」と記される。山崎左馬之助は井ノ草鳥山城を攻め、城主中村広忠は城から脱走した。ついで青野村高根城の

青野貞政を討ち、赤松藤兵衛吉広の岡山城を攻める。『摂北軍記』が最も詳しく描くのは、この山崎左馬之助と赤松藤兵衛吉広の戦いである。「山崎勢岡山之城を責る事」「上野が原小川山戦之事」の二章にわたって両軍の死闘が詳述される。

次第に不利になった赤松方は、「赤松藤兵衛とハ水魚の中」の蒲公城主松原右近太夫真則に援軍を乞う。松原山城之助が手勢百余人を率いて攻めて来るが、上野が原の合戦で深手を負った山崎方の幸田半左衛門広利が、「深手ながら立上り、此儘にてハ勝利弥有がたし」と出陣、激戦を制して松原を追い返す。援軍も来ず、赤松は岡山城に籠城することになり、家来を落ち延びさせて、藤兵衛自身は切腹して果てた。永禄七年二月十日のことであった。赤松を討ったことで、その名を上げた山崎のもとに、桑原左衛門など近隣の郷士たちが次々と降伏してくる。勝利を得た山崎は家老車瀬政右衛門を中心に立石に新たに城を築く準備を始めるが、隣接する蓮花寺と悶着が起こり、これが原因で家中不和になってくる。「車瀬も幸田をにくみ家老中不和に成し事も、本ハ此蓮花寺より事をこりし也」と記す。以後の『摂北軍記』は、この家臣同士の対立、お家騒動に筆を費やすのである。

三田谷筋を支配した山崎は旦那寺を金正寺に定めようとし、本尊をめぐって桑原左衛門と衝突した。幸田半左衛門・竹中弥兵衛が桑原に詫びを入れる。その桑原左衛門が永禄八年に病死し、後継がいないため桑原家は断絶した。幸田は桑原家を再興を企てたが、車瀬政右衛門がこれを阻止したので二人の対立が決定的になった。車瀬は暇を乞うて山崎を離れた。その半年後、今度は幸田半左衛門が何者かに闇討ちされた。車瀬が疑われたが、下手人は不明であった。残った竹中弥兵衛は取り立てられ、主家山崎の姓を名乗った。

『摂北軍記』は山崎の家老幸田半左衛門を他の家臣に比して詳しく描く。戦場での活躍だけでなく、諸士からの人望なども描いており、幸田に対しては極めて好意的である。

その後、山崎は織田信長に仕え、近江に所替えをしたが、豊臣秀吉が播州三木の別所長治を退治した時、松原の居城蒲公英城も落城、三田を中心とする北摂は焼け野原になった。山崎左馬之助恒政は生国にもどり、三田に城を築き、千秋万歳を楽しんだ、として終わる。

『摂北軍記』はそこに記載されている記事の真偽も定かでない。年代も矛盾や錯誤があるし、人物も特定できないものがほとんどである。荒木村重と山崎左馬之助[6]が他の資料に見えるくらいで、他の人物はせいぜい郷士・国侍層とその家来で、いわば在地に埋もれた人々であったからである。

『摂北軍記』には、「此乱世の時を見合せ」「かやうの戦国に生まれながら命を惜む事あるべからず」「今乱世の時故、もし敵寄来り

なバ」というように、乱世の意識が濃厚である。北摂有馬郡の、しかも三田谷筋という極めて局地的な地域の戦国時代の回想を書き記すには、度重なる戦火が資料を消失させていたため困難であったろう。同様な事情を持つ地に時折見られる『太閤記』や『陰徳太平記』などからの抜粋でなく、不整合ながら自らの地の戦国史を描こうとの試みは、中世の軍記ものを合戦表現の手本として、それなりにその目的を達成している。旧版『三田市史』が「庶民的伝承史料」と呼んだ『摂北軍記』などの軍記が描く「史実」に寄せた人々の関心のあり所を、今に伝えているとは言えるだろう。『摂北軍記』は、最後は山崎家の内紛に収斂されてしまうが、それでも北摂の戦国史を全体的な視野を持って描こうとしている点は注目しておいていい。

三

北摂の支配者となった山崎氏を描く軍記に『山崎記』がある。[7] この作品には、「干貝家由来の事」「松原の系図」など、この地の郷士の家系や先祖について記す章段や「山崎城地見分の事」「長尾山平福寺の由来」などの地誌関係記事の章段を持っているが、最も特徴的なことはそれらの記事の間を縫う形で挿入される「敵討ち」の話である。

この作品も『摂北軍記』同様、書き出しには問題がある。「竹田・細川両人が赤松光助を征伐せんと」播磨国に下った時、加東郡東条の城主小田藤右衛門尉政春も落城の憂き目に遭ったと書き始めるのである。赤松光助（満祐）を竹田（武田信繁）・細川（持常）が征伐するために播磨に下向したのは、嘉吉の乱（嘉吉元年　一四四一）であり、『山崎記』が主題とする時代とは百年以上の開きがある。[8]

『山崎記』と『摂北軍記』の関係であるが、『山崎記』は明らかに『摂北軍記』を本にしている。『山崎記』の「干貝家由来の事」に、

弘治元年卯伊丹有岡の城主荒木吉三郎村重、摂州北の庄を征伐せんと、其勢千五百余人小林城主高山を攻め落し、高山降参しける次に、丸山五郎兵衛を打戦ひ、是も降さんに及びけれバ、北谷筋へ入こみ、北畑助右衛門を打取り、横道を征伐し、桑原左衛門と一戦して打ち勝ち、中川佐渡もこうさんし、此面平山城をせめんと、十重廿重に取まき戦と云へとも、干貝武勇の家臣数多あれハ、落城せす数日を送りける所に、十一月十七日有岡より早打来り、親死去の由なりけれハ、村重早速貴志の庄を陣払ひし、諸軍引つれ有岡へ帰城す。夫より村重此谷筋へ出です。後に武名をあげゝる内、播州より赤松藤兵衛五百人の勢にて小屋山東光寺に陣し、裡手よりひそ〳〵干貝か城へ押寄せ関

を作り、夜軍さにて無二無三に押しよせ、干貝が城に火をかけ、なんなく干貝を打取り、加茂の庄岡山に城をきづき、勇名を此谷に上けにける。此赤松城落しの様子ハ、前冊に明白也。

と、荒木村重の北摂侵攻を記すが、これは先に引用した『摂北軍記』の記事を簡略にしたものであることは明瞭で、さらに「此赤松城落しの様子ハ、前冊に明白也」の前冊とは『摂北軍記』の「赤松松原摂州を出る事」の「赤松藤兵衛吉広ハ、四百人の勢を引連れ、小屋寺東光寺に陣取して、西野上村四ツ塚の城主干貝と戦ひにおよび、数日送りて終に干貝を討取り、武名此谷に響しける」等の記述を指している。

先に触れたとおり、『山崎記』には、二つの「敵討ち」の話が記される。この作品の特徴的な部分であるので、触れておく。

小田政春の東条城が落城した時、家臣赤松九右衛門由利は娘を連れて逃走した。途中で病気になり苦しんでいたところを、浪人山岡八右衛門に介抱される。ところが山岡は赤松九右衛門の鎧・鑓に目がくらみ、九右衛門を切り捨てて奪い取る。娘は土地の百姓の助けで三草城下の条喜右衛門に奉公する。一方、逃走した山岡は有馬郡の百姓又兵衛の後ろ盾で干貝家に仕官する。天文二十一年（一五五二）、娘は十六になり、父の敵を捜すため暇を乞い、丹後・丹波を巡ったが出会えず、有馬郡で乞食のようになっているのを救われ、百姓又兵衛の息子久五郎の嫁になる。その後、干貝が赤松藤兵衛に攻められた時、干貝の家臣になっていた山岡八右衛門は奮戦し、落命してしまう。久五郎の嫁は自分が探し求めていた山岡が死んだことを知り、「未来のとつさんへ言ひわけなし」と自害する。残された夫の久五郎は妻の死を契機に武士になり岡村久五郎と名乗る。

これが一つめの敵討ち譚である。二つめの敵討ち譚は、山崎がこの地を治めたところから始まる。二つの敵討ち譚を繋ぐ役割を担うのが岡村久五郎である。

山崎左馬助恒政は元亀元年（一五七〇）立岩城を築城し、さらに千正山正福寺の本尊を自らの祈願所の本尊にしようと強引に求める。これがきっかけになって山崎と正福寺が対立した。その仲介に入ったのが岡村久五郎で、その弁舌が認められて山崎家のお抱えとなる。一方、桑原村の百姓九郎兵衛の息子九兵衛は美人の妻をもっていた。その妻を山崎の家臣湊新右衛門が見初め、言い寄るが拒絶される。その湊が墓参りに出掛けた時、父の九郎兵衛が湊に気付かず通り過ぎる。湊は無礼だとして九郎兵衛を切り捨てる。たまたま通り掛かった山崎家の家老幸田半左衛門に、湊は無礼討ちなので見逃すよう頼む。父を殺された九兵衛の深い嘆きに同情した幸田半左衛門は、下手人が湊新右衛門であることを告げ、ただし武士の約束で力を貸せない、隣の松原領に夜抜けして敵討ちの時期を待つよう勧める。

天正二年（一五七四）五月、ついにその日が来る。湊が岡村久五郎とともに松原の尻知川へ釣りに出掛けることを九兵衛に伝えると同時に、同行する岡村九兵衛に敵討ちが行われるが手出しせぬよう言い含める。九兵衛はみごと父の敵を討つことができた。加勢しなかった岡村は城主山崎に咎められるが、幸田の取り成しで一件は落着したというのである。

この『山崎記』の主題は山崎家の由来を説くことでも、山崎の戦功を語ることでも、北摂の戦乱を描くことでもない。むしろ詳述される二つの敵討ち譚にあると言えるであろう。山崎左馬之助の北摂支配の過程は事件の背景に過ぎないのである。この作品には近世に入って盛行する敵討ちや敵討ちを題材とする文学・芸能の隆盛と深く結びついているのであろう。きわめて局地的な二つの出来事を結びつける「狂言回し」的な役割を果たす岡村久五郎の存在も興味深いが、この作品でも山崎家の家老幸田半左衛門は好意的に描かれている。本書『山崎記』はより軍記的要素をもった『摂北軍記』を利用して、近世的な敵討ち譚に仕立て直した作品であると言えよう。

四

『山崎記』に続くこの地の軍記的作品が『摂北有馬郡丹北城軍記』である。この作品も『三田市史』第三巻に収められている。内題は

「摂州有馬郡蒲公英軍記」となっており、有馬郡日下部村蒲公英城主松原氏の滅亡を描く落城記である。異本として『松原軍記』『天正七年記』と称するものがあり、後者の別称は「摂州有馬郡草下部蒲公英城記」という。[9] この『摂北有馬郡丹北城軍記』（以下、『丹北城軍記』）は『山崎記』を承けて作られた軍記であることは、途中に挿入された記事、

爰に三田桑原村に百姓九兵衛と言ふもの夫婦、山崎新左衛門（『山崎記』は湊新左衛門とする）と言者に親を討れ、段々敵討の願ひを上るといへども、乱世の時節なれバ御聞入なく、口惜く思ふ。夫婦連にて桑原村をいで松原家を頼ミ、松原達三郎殿に奉公致しける事半年斗りなり。是を聞人ミな〳〵哀れに思ひ、九兵衛を諫めて世話をいたし、武げいの達人となしける。敵討の義ハ山崎記に有ゆへ、此書にハきさず。

に、「山崎記に有ゆへ、此書にハきさず」としているところから明らかである。

この『丹北城軍記』の巻頭には八ヶ条の目録が掲げられており、その第一章「松原家由来之事」には蒲公英城主松原筑前守貞友は別所大内之進の甥であることから記す。貞友は弘治三年（一五五七）に死去、奥方は出家して知角院殿といった。子どもが三人あって長男貞利、次男貞秋、三男友久といい、長男の貞利の妻は「大後弾正

の娘」であった。ちなみに大後は淡河が正しく、播磨から摂津北西部に威を振るった別所氏の一族である。松原家は君臣和合して、家中安泰であったと書き始める。ただし次章の「丸山城合戦の事附り山口五郎左衛門滅亡之事」の記述を含めて、旧版『三田市史』は「此のあたりは松原氏系図の記事と相違し信をおくことが出来ない」とし、「山口丸山城の山口五良左衛門との戦の有様が戦記物語風に物語られているが、果して史実であったかどうか疑わしい」とされている。この本もまた『摂北軍記』や『山崎記』同様、史実的には信頼するに値いしない伝承か虚構で作られているといえよう。

第一章で松原家の由来を記した後、本書は松原家の家臣山本某が庭の松を切り倒した話が続く。城から見えるこの松を、先代の貞友が愛で、「此松之かる、時ハ、落城致共苦しからず」と願立てをしていたのに山本が切り倒し、それがもとで山本は乱心、刃傷沙汰を起こし、屋敷に籠もって捕り手を相手に大立ち回りをして、ついに討手に殺され、獄門に掛けられる仕儀となった。その三年後、蒲公英城は落城したのである。山本の乱心も、落城もこの「松を切し報ひ」だろうと、因縁話めいた伝えを載せている。

この『丹北城軍記』は『山崎記』同様、軍記的な背景を持っているが、その一つは松原家と丸山城の山口氏との合戦であって、その原因は両家家臣の川釣りでの些細な諍いだったことを記す。怒った松原は三百七十騎の手勢を率いて丸山城を攻める。この戦いで奮戦したのが立花陣右衛門で、松原方では「立花を東国の山本勘介とぞ申ける。女中方迄も立花を鬼神の如しとぞ言ひける也」と記される。この立花陣右衛門とその子立花八郎が『丹北城軍記』の主要な登場人物といってよい。この山口との合戦で松原の三男右衛門友久が深手を負い、それを案じた母の知角院殿はもともと病弱であった上、この心痛が重なって死去する。その喪中に川釣りの殺生をした藤野将監宣政は追放の身になるが、後に松原滅亡後は右衛門友久を匿い続けた。

さて、『丹北城軍記』がかなり力を込めて描くのが城中の世話的な出来事であるが、その中心は立花八郎をめぐる一連の艶聞譚である。城主松原貞利の奥方は八千代御前といい、召使いの女中たちが大勢侍っている。奥方が中心になっての四方山話で、家中の美男子の噂になり、青木力之介・酒井重五郎・立花八郎の美男比べに話が及び、立花八郎を奥方の前に呼び出すことに決まる。立花八郎は仕方なく御前に出仕する。「奥方も家中の美男ハ是成ト宣し故、女中皆々執心深くぞありける」ということになってしまう。しかし「其後に奥方の御中立にて、竹沢良安が娘を八郎が妻にぞ成」したのであった。立花と竹沢良安の娘八重鶴の結婚の話を中断する形で、その頃の松原を取り巻く状況が記される。それは、天正六年の春にな

り、松原家と山崎家とが不和を生じ、戦いに及んだことである。『丹北城軍記』は「其後度々合戦有しに、松原家の勝利ハ度々にて、山崎家ハ危ふかりける」と松原が優勢であったが、山崎が織田信長に助勢を求めたため形勢が逆転して松原が負けたというのである。「是則山崎が高運也。松原ハ澱運ニして滅びける」と松原家を贔屓する本書だけの記述があるのは、本書作成の背景が窺われる。

立花八郎と妻八重鶴は夫婦仲も良く暮らしていたが、家中の青木力之助なる者が八重鶴に横恋慕をし、夫立花八郎の殺害を企てる。青木は友人永井勝蔵と立花の闇討ちを試みるが、逆に二人とも斬り殺されてしまう。立花にはお咎めもなかった。家中の事件に続いて再び天正七年の織田信長の摂津進攻に戻り、松原の滅亡が記される。信長は荒木村重を征した後、明智光秀が加勢を求めてきたため、軍勢を丹波に進める途中、北摂を切り従えて行く。郷士たちが次々降参していく中で、松原だけは本家別所に対する義理立てもあって、蒲公英城に籠もり織田軍と一戦を交える。この戦いで立花陣右衛門は信長軍の中川瀬兵衛と壮絶な合戦をして、背後から鑓で突かれ絶命した。息子の立花八郎は先の刃傷沙汰で蟄居していてこの合戦には出ず、妻と備前に逃げ、後に浮田家に仕官した。松原家の次男山城守貞秋も塩川伯耆守に攻め立てられ、家来二人と自害をしようとするが、御殿が炎上するのを見て「いかに両人、罪作るとも思ふとも今壱軍し而冥土の思ひ出にせバやとおもふ、いかに」と三人で大勢の中に突っ込んで行く。散々に戦い、「後ヘツと懸抜て我身を見れバ、切疵数ヶ所にして、太刀もさゝらの如く成りけれバ、傍に投捨、指添抜持、両人が方を見れバ、早討死して首を敵中に差上たる。山城守ハ今ハ此迄と思ひ、敵の中へ欠（懸）入、伯耆守が家臣長谷川三郎右衛門と言者ト引組で、差違へてぞ果られける」とその凄絶な死を詳細に描く。最後に長男の松原左近太夫貞利の切腹を述べて、全巻を締めくくる。

この『丹北城軍記』もそこに記されている日付が、転写によると思われるが、天正七年を十七年とするなど表記の混乱があり、史実の確認は難しいが、松原の蒲公英城陥落を天正七年三月十五日とし、その日の「朝ハ雨天なりしが、巳刻より晴天になり、寄手大に歓び押寄ける」と具体的である。

また、『信長公記』巻十一の天正六年十二月十一日の信長摂津進攻記事、

所々に御番手の御人数仰付けられ、羽柴筑前に相加へ、佐久間・惟任・筒井順慶、播州へ差遣され、有馬郡の御敵さんだの城へ差向ひ、道場河原・三本松二ヶ所足懸り拵へ、羽柴筑前秀吉人数入置き、是より播州へ相働き、別所居城三木への取出城々へ兵粮・鉄炮・玉薬・普請等申付け帰陣候なり。

とある「道場河原」こそ蒲公英城であり、「さんだ（三田）の城」が攻撃され、別所の籠もる三木城への足掛かりとされた事実を、この作品は踏まえている。

見てきたように『丹北城軍記』は、松原家と丸山城主山口家との抗争と信長の三木城攻めに巻き込まれ、松原家滅亡に至った山崎家との戦いの二つの合戦を中心としている。『信長公記』が数行で片付けている三田への進攻を、在地の立場からそこに起こった家中の出来事を交えて書き留めた軍記であった。

松原家側に立った『丹北城軍記』も、信長に付いた敵である山崎左馬之助を、「此時節ハ善悪の差別なり。只威勢の強につき家の長久お（を）ぞ計りけるとぞ也」と非難しない。それどころか、「伝に曰、山崎左馬の助ハ忠孝全く人にて、□しニ而、則天是を助給いしとなり」と賞賛しているのであるが、それは作者の時代観によるものであろう。『丹北城軍記』には「今戦国の時なれバ、盛衰定がたく」「今戦国の時、惜しき勇士を失ひし事よ」「今戦国の世也、小事より大事ニなる事多し」「今又四海乱る、事甚しき時節にて」「乱世の時節なれバ御聞入なく」「女なれ共今戦国の時節なれバ、戦場へも罷こし名ある勇士と討死し、名を天に揚げたし」と、戦国乱世の意識が強い。この意識は『摂北軍記』にも見られたものであった。

ここに取り上げた三つの軍記は、戦国時代を題材にしてはいるが、成立は近世に入ってからであることは言うまでもない。戦国時代の摂津の郷士・国人層は、摂津守護職であった細川氏と被官の関係にあったが、細川家の内部抗争と分裂に巻き込まれ、信長の出現で残ったのは僅かに池田氏・伊丹氏の二氏であった。[10] しかも、荒木村重によって池田氏は天正元年に、伊丹氏は天正二年に滅ぼされた。その後、信長が毛利との対戦を構えた時、別所長治の三木城、丹波の八上城攻略の拠点になった摂津は、軍馬に蹂躙されることになる。識字層が増え、自分の住む土地の歴史に対する関心が高まった近世に戦国時代を題材にした軍記がたくさん制作される。この北摂の地でもいくつかの軍記が作られ、転写され、改作された。しかし、永禄・天正以前に遡ることはほとんどない。たとえ遡っても間違いだらけである。信長の出現がこの地の歴史回顧までも規定したと言えるだろう。それでも戦国軍記を作成するのは、ある意味で魅力的な時代でもあったからに違いない。『山崎記』の内神村の百姓久五郎は妻の死後、「何卒此上ハ我も武士になりたき望にて、大小をこしらへ時節を」待って武士になり、『丹北城軍記』の松原家家臣藤野将監宣政は追放になったあと、「田中村にて百姓と成」った。武士と百姓の間がなかった時代への想いも、これらの在地軍記が作られた根底にあったのであろうか。

て相果んとせられしが、郎等申けるは、此山中にて御腹を召されなば、賊徒の為に侵れんは必定ならん。詮なき御生害にてやあるべき。向に見へし千本村の地蔵堂にて御生害あるならば、六道能化の御引導もむなしかるべからずとみな〳〵いさめければ、刑部介実にもと是に従ひ、地蔵堂に馳入り、腰刀を抜て横腹につゝこみ、其血を以て堂の柱に書をかるゝ、辞世の一首に、此堂に立より藤の腹切るは城山の城に煙たつゆへ」とあり、嘉吉の乱の時に小田が滅亡したことは事実である。

⑨『ひょうごの城紀行』上「蒲公英城」（橘川真一氏執筆　のじぎく文庫　神戸新聞総合出版センター　平成10年）参照。「天正七年記」については、旧版『三田市史』に「兵庫区道場町松原義雄所蔵の近世の写本である」とある。

⑩ 森田恭二氏『戦国期歴代細川氏の研究』（和泉書院　平成6年）

注

① 『摂北軍談』などの異本がある。貴志御霊神社蔵「有馬叢書」第三巻所収本と今井義雄氏所蔵本の校訂本文が『三田市史』第三巻「古代・中世資料」（三田市　平成12年）に、また『有馬郡誌』上巻（昭和4年）に所蔵不明の本の翻刻が収められており、それぞれに異文を持つ。なお、地名・人名などの表記は全ての作品とも、それぞれ依拠した伝本のままとした。

② 『三田市史』には現在刊行中のものと、昭和四十年に刊行された上下二巻のものとがある。後者を旧版『三田市史』と表記する。

③ 「兵庫史学」12号（兵庫史学会　昭32年4月）

④ 伊丹資料叢書4『荒木村重史料』（伊丹市役所　昭和53年）所収

⑤ 旧版『三田市史』は「北摂軍談には弘治元年の春、荒木吉三郎村重、国主を望み、北ノ庄を征伐小林ノ城主高山清左衛門、田中の城主北畑助右衛門を降参せしめたとあるけれど何の根拠もない事である」とする。

⑥ 山崎左馬之助については旧版『三田市史』下巻が詳細に考証しているが、『田辺城合戦記』（続々群書類従3所収）に「摂州三田　山崎左馬介宗盛殿」と見えるところから、慶長七年に山崎左馬之助恒政の一族がこの地を領していたことが知られる。

⑦ 『三田市史』第三巻「古代・中世資料」に「有馬叢書」本が翻刻されている。

⑧ 『赤松盛衰記』上巻「村上源氏赤松家先祖之事」に「一、同郡（加東郡）東条小田城主依藤山城守光勝、父は太郎左衛門、揖西郡千本谷にて嘉吉の比自害す。豊房と号す。家長に村田氏有。」とあり、同書中巻「赤松嘉吉年間録」に「加東郡小田の城主依藤刑部介豊房は前日より白幡の城へ行れけるが、其朝手勢八十騎ばかり打つれ、帰るさの山路にて、城山の煙をみやり、最早城は落て味方敗北せりと覚ゆれば、爰にて腹切